創立二十周年記念シリーズ

日本音楽集団

第八十二回◆春の総合定期演奏会

無から有を築いた二十年　富樫　康

日本音楽集団の二十年　木村重雄

作品解説　田中悠美子

日本音楽集団二十周年に寄せるメッセージ

定期演奏会の記録（上）

邦楽現代ニュース　半田淳子

台湾演奏旅行に参加して

日本音楽集団の活動とご案内　他

昭和五十九年五月十六日［水］七時開演

朝日生命ホール

新宿駅西口より徒歩三分

ごあいさつ

代表　長沢勝俊

一九六四年十一月十七日、日本音楽集団の第一回定期演奏会が第一生命ホールで行なわれました。この演奏会は同年四月「私達の伝統楽器で現代に生きる音楽を創ろう」という旗印のもとに、流派を超えて集まった十四名により結成された日本音楽集団の音を世に問う第一声であったわけです。

それから二十年、私達の集団は総員六十名余の大きな団体に成長し、今年創立二十周年をむかえるにいたりました。この間、八十回を超える東京での定期演奏会をはじめ、国内各地での演奏会、また十二次百三十回を超える海外公演等、当初にかかげた目標にむかって、多面的な活動を幅広く精力的に展開してまいりました。

当然のことながら、初めての道を歩むものに課せられた試練はきびしく、幾多の試行錯誤をくりかえしながらも、団員の志は高くはげしく燃え、そのエネルギーを結集しながら今日をむかえることが出来たことに大きな喜びを感じております。

これもひとえに集団を支持し激励して下さった多くの皆様のお力添えのたまものと、団員一同心より感謝している次第です。

今年はこの集団結成二十周年を記念して、六回の演奏会シリーズを組み、集団の現在にいたる歩みの一端と、未来に対する展望を音を通じて御披露したいと思っております。

第八十二回春の総合定期演奏会では、集団の第一回公演で演奏された清瀬保二氏の「尺八三重奏曲」をはじめ、集団の委嘱作品また集団とかかわりのあった作品の中から多くの方がたに愛聴され、しかも集団の魅力を充分に発揮出来る作品を四曲選びました。

現代邦楽の作品はまだまだ数が少なく、いわゆる十八番ものが要求されている現状です。あらゆる機会をとらえ再演することにより、演奏の質的向上を図り、レパートリーとしての定着に努力したい考えです。

第八十五回秋の総合定期演奏会では、公募作品を含む全曲委嘱初演作品というプログラムにより、集団の生命ともいえる創作活動に焦点をしぼりました。集団の活動は新しい作品の誕生と、これに挑戦する演奏家との激しいぶつかりあいの中で新たな活力を生みその力をたくわえてきました。

個性豊かな邦楽器の合奏の分野には、まだまだ魅力ある組合せや、さまざまな手法があるはずです。これらの合奏の可能性をほり起こし、新しい息吹を与えることこそ、これからの集団に課せられた重大な使命の一つであると自覚しております。

他の四回の演奏会も二十年にわたり、培ってきた力を充分に反映させた清新なプログラムにより聴いて頂く予定です。

ソロからゾリステン、そして大合奏という私達のかかげた壮大な旗印に恥じないよう、創立二十周年を機会に団員一同さらに心をひきしめ、音楽創造の道に邁進していく覚悟でおります。

今後ともよろしく御批判御指導を頂けますようお願い申上げます。

プログラム

一、ディヴェルティメント　佐藤敏直　作曲

〔笛〕　西川浩平・竹井　誠
〔尺八Ⅰ〕　坂田誠山・田嶋直士・水谷雅康
〔尺八Ⅱ〕　福田輝久・藤崎重康・米澤　浩
〔三味線Ⅰ〕　野口美恵子・加藤　洋
〔三味線Ⅱ〕　太田幸子・田中悠美子
〔箏　Ⅰ〕　木村玲子・内藤洋子・大畠菜穂子
〔箏　Ⅱ〕　花房はるえ・滝田美智子・佐藤由香里
〔十七絃〕　宮越圭子・内藤久子・島崎春美
〔打楽器〕　尾崎太一・堅田啓輝
〔指　揮〕　田村拓男

二、胡弓三章　牧野由多可　作曲

〔胡弓Ⅰ〕　畦地慶司
〔胡弓Ⅱ〕　砂崎知子（客演）
〔胡弓Ⅲ〕　杜　菊衷
〔笛〕　西川浩平
〔尺八〕　宮田耕八朗
〔箏　Ⅰ〕　吉村七重
〔箏　Ⅱ〕　滝田美智子
〔十七絃〕　内藤洋子
〔打楽器〕　尾崎太一・堅田啓輝・伊藤映子（客演）
〔コントラバス〕　渡辺恭一（客演）
〔指　揮〕　田村拓男

三、尺八三重奏曲　清瀬保二　作曲

〔尺八Ⅰ〕　福田輝久
〔尺八Ⅱ〕　藤崎重康
〔尺八Ⅲ〕　田嶋直士

四、郢曲　鬢多々良　伊福部昭　作曲

〔笛　Ⅰ〕　西川浩平
〔竜　笛〕　芝　祐靖（客演）
〔能　管〕　藤崎重康
〔笙〕　多　忠麿（客演）
〔筑前琵琶〕　田原順子
〔薩摩琵琶〕　半田淳子
〔箏　Ⅰ〕　吉村七重
〔箏　Ⅲ〕　花房はるえ
〔小　鼓〕　尾崎太一
〔楽太鼓〕　伊藤映子（客演）
〔指　揮〕　田村拓男

〔笛　Ⅱ〕　竹井　誠
〔篳　篥〕　大窪永夫（客演）
〔箏　Ⅱ〕　木村玲子
〔十七絃〕　宮越圭子
〔大　鼓〕　堅田啓輝

作品解説

一、ディヴェルティメント　佐藤敏直 作曲

一九六九年、日本音楽集団の第十回定期演奏会で委嘱初演され、その後集団の演奏会は固より、大学の邦楽グループ等、若いアマチュアにも度々取上げられ、今日迄多くの人に親しまれている作品である。曲名（モーツァルトやハイドンが好んで作曲した軽妙な娯楽音楽的性格の強い器楽合奏形式）が示すように、作曲者は江戸時代の封建制・家元制の影響下に閉ざされた邦楽を、自由かつ率直に人間の叫びを表現する開かれた音楽へと解き放つことを意図したということで、そこには日本人が自国の伝統音楽に持たざるを得なかった偏見を取払う意味も含まれている。

一楽章は短調的、二楽章は教会旋法的、三楽章は五音音階的な傾向を持つが、全体に極めて自由で、伝統音楽にはなかった新しい楽器の用い方、伸やかで生き生きとした曲想、親しみ易い旋律線、アンサンブルの楽しさ等、現代邦楽合奏曲のポピュラー的存在といえよう。

二、胡弓三章　牧野由多可 作曲

一九七四年度芸術祭ラジオ部門音楽の部の参加作品としてＮＨＫが企画制作・委嘱し、同部門優秀賞を受賞した。舞台初演は一九七七年、集団の第四十回定期演奏会で行われている。作曲者は、日本の伝統芸術に内在する美感と自らの体質が求めるオブジェとの適合を発見して以後、邦楽と関連を持った創作を行っており、日本の伝統を尊重して受け継ぎつつ、それと現代的要素をマッチさせるという態度をとり続けている。この曲は、それ迄現代邦楽の活動の中では重要視されず、開発の遅れていた胡弓を取上げ、邦楽器合奏の中で高中低音の三重奏として生かし、胡弓本来の奏法を踏まえた上で、更に新しい音の世界を創り上げた画期的作品である。

第一章は胡弓と大小鼓のみの合奏、二章では笛と尺八・箏が加わり、三章では更に太鼓とコントラバスが加わる。小中大三挺の胡弓は、それぞれ伝統的三弦胡弓、宮城道雄の改良胡弓、田辺尚雄考案の玲琴が使われていたが、今回は玲琴に代り、中国の民族楽団の為に三年程前に改良された低音擦弦楽器「琵琴（ひきん）」が、中国の奏者によって演奏されるので興味深い。また、作曲者により小胡弓を中心とするカデンツが三楽章に新たに書き加えられている。

三、尺八三重奏曲　清瀬保二 作曲

清瀬保二は、日本の作曲界にあって、戦前の洋楽的作曲法の形式的輸入や模倣に狂奔していた時代から戦後迄、常にオリジナルな日本的音を求めて、中心的存在として活躍してきた人であった。（一九八一年物故。）前記の佐藤敏直や、集団の長沢勝俊も教えを受けている。この作品は、一九六四年、東京尺八三重奏団（村岡実・宮田耕八朗・横山勝也）により委嘱初演、同年集団の第一回定期でも演奏されている。それ迄、洋楽器で日本的なるものを求めていた作曲者にとって、初めての邦楽器による作品であった。洋楽のもつ近代性も、多年培われた民族の音感も両方否定できないという観点から、洋楽器で度々用いていた日本の五音音階を使い、洋楽の形式が配慮されている。

第一楽章は速いテンポで、律音階を用いた三部形式。二楽章は民謡音階によるゆっくりした楽章で、メリスマが細かく入っている追分様式の民謡を思い起こさせる。これは、作曲者が子供の頃郷里で聞いた尺八への郷愁であるという。三楽章は再び速くなり、律音階に戻る。挿入楽句を入れながら、主題を色々転調して繰返し、コーダで終っている。簡潔で明るく率直な作風のうちに、自然や風土への抒情が漂う作品である。

四、郢曲　鬢多々良　伊福部昭 作曲

伊福部昭は、戦前戦後を通して、洋楽器を用いて土俗的、野性的な民族性を追求した作曲家で、集団の三木稔もその教えを受けている。この曲は、一九七二年、文化庁の委嘱により作曲、翌年集団の第二十回定期で初演され、作曲者にとってやはり初めての邦楽器合奏の作品である。郢曲鬢多々良とは、平安時代、豊明節会という朝廷の儀式の饗宴で行われた歌謡で、舞を伴っていたと考えられる。作曲者によれば、邦楽器を使うに当たり、江戸以降の近世邦楽を考えると、旋法的にもリズム的にも制約を感じる為、平安時代迄遡り、日本と唐・天竺の旋法が混った、自由リズムの舞の音楽を想定して曲名にしたということである。

第一部は、箏のソロに続き、細かいリズムを刻む弦のオスティナート（舞楽の登場音楽に於ける追吹きという技法を取入れている）に乗って、管が大陸的旋律を奏でる動的部分。中間部は、雅楽のイメージを土台に琵琶、箏、竜笛、篳篥、笙が自由に歌う静的部分。途中に、打楽器のリズムに乗った舞楽的イメージの部分が挿入される。そして再び第一部分が現われ、全楽器による乱舞で幕を閉じる。たくましい土俗的エネルギー、素朴な抒情性、異国情緒、オスティナートを強調した野性的リズム等、独特の語法と雅楽器の響きが、私たちを古代の世界へと誘ってくれる。

（田中悠美子）

無から有を築いた二十年

富樫　康

長年の歳月を経て日本の国土全域に深い根を張った伝統音楽と、日本に移植されてから百余年で国民の間に急速に浸透した西洋音楽の、二つの異なった音楽文化をかかえもつわれわれにとって、その両者を、どう接合させ、或いはどう影響し合うかの問題は、われわれ音楽人にとって長年の懸案であった。特に邦楽家にとっては数の上では優位にあるとはいえ、古典の伝承だけでは即時代性を次第に失いつつある状況を何とか解決しなければならない必要性を切実に感じていたのである。

はじめ宮田耕八朗、横山勝也、村岡実の三人の尺八奏者が結束して立上った新音楽運動は、その三年後の一九六四年には更に他の邦楽器である箏、三絃、琵琶、笛日本の打楽器を加えた十四人の日本音楽集団結成へと発展した。それによってこれまでは独り、或いは少数で行なわれていた邦楽も、洋楽オーケストラのごとく、多種楽器の集合によって、音色のヴァラエティと、強力なダイナミズムを獲得して、その表現力は飛躍的に増大したのである。だがこれほどの大編成になると、既存の楽曲がある筈はなく、自からそれに対応する楽曲が必要となるわけで、それを作曲家が作らなくてはならない。すると今迄の邦楽作曲家の手には負えなくなり必然的に洋楽の作曲に馴れた人が事に当らなければならなくなった。

清瀬保二、三木稔、長沢勝俊、広瀬量平らは、前記尺八の会に作曲家として登場した人物であるが、三木、長沢はそれに引き続いての日本音楽集団創立の立役者であり、集団の運動を推進する上で最も主軸をつとめた人物である。

第二回定期演奏会は、会場も今日と同じ朝日生命ホールで、その時演奏された三木の《日本楽器のための前奏曲》(のちの《古代舞曲によるパラフレーズ》の一楽章)は実に強烈なショックを受けた。日本楽器群の集合が、これほどダイナミックな表現力をもちうることは想像も及ばなかったのである。その後も集団は長沢の《三味線協奏曲》や、団以外の作曲家、牧野由多可や、柴田南雄、八村義夫、安達元彦、池辺晋一郎、伊福部昭等々に作曲を委嘱して、多彩なレパートリーを拡げていった。そして一九七〇年にコロムビアで制作した四枚組レコード「日本音楽集団による三木稔の音楽」は芸術祭大賞を受賞して金字塔を築くビッグイヴェントとなった。

年二回の定期演奏会のほか、国内の活動は急激にひろまる一方、一九七二年には遂に東西ヨーロッパ七ヶ国を回る国外演奏旅行が挙行され、その成果は認められてこれまで既に十二回の世界楽旅を重ねるまでに至った。これは単に日本の古典音楽に対する評価だけでなく、現代に生きるクリエイティヴな日本音楽に世界が注目するようになった表れと考えて差支えないのである。更に一九八一年のライプチッヒ・ゲヴァントハウス・オーケストラから委嘱された三木稔の《急の曲》を同楽団と共に彼地で初演したのも画期的なイヴェントだった。また八三年の中国公演も快挙で、日中友好の絆が結ばれたが、そのとき、「まるで唐時代の音楽がやってきた」との意見が出たのは意外だった。今の北京中央民族楽団その他では自国の伝統楽器をすべて平均率に直してしまったので、本来は中国から渡来したものとはいえ、祖先は同じでも日本の伝統楽器とは異なった感覚で響くのである。その点では日本の方が保守的と見られたわけであるが、それだからといってわれわれはだれも中国に倣って平均率化すべきだとは考えない。私はむしろ中国の音楽政策は禍ちを犯したように思えてならない。平均率化したことは、洋楽器的な便利さを得た反面、むしろそのために音楽が平面的になり、伝統楽器が保有していた独特な深い味わいが失なわれてしまったことを指摘したいのである。日本では野坂恵子が二十絃箏を開発したのとは基本的に意味が異なるのである。また彼らが新たに作曲した音楽は、大合奏の場面でも殆どユニゾンで演奏するため、音楽に奥行きや深みが不足しているのである。むろん無調音楽等はない。従って大衆のためには解り易いメリットはあるものの、飽きが来る度合も早いのである。少くとも作曲面においては日本は世界の新しい技法を貪欲に吸収しているせいか、非常に高い水準を歩んでいるのである。またアンサンブルの人数も、多ければ多いほどよいというものではない。日本音楽集団の編成は、数においては中国楽団の約三分の一であるが、それでいて集合体の目的は立派に果している点も考慮すべきである。だが民族楽団の種類は中国の方がはるかに多いのは認めなければならない。日本音楽集団では始め胡弓がなく、ここ数年前から入れるようになったが、こうした擦絃楽器が日本では死滅していた理由は不可解だが、中国では健在なのは強みである。また笙が日本では雅楽の中でのみ生き続けていたのに、中国中央民族楽団では大小多数使われているのも考える必要がある。そのほか東洋古代のハープともいうべき箜篌(くご)を最近国立劇場では正倉院の遺品から造り演奏したが、これもいつの日か、参加できるときがくるのを心待ちにしている。

いずれにしろ中国の民族楽団や香港にもある中楽団は、政府が出資して楽器や楽員をキープしている熱の入れようは本格的で、それに反して日本に唯一つしかない日本音楽集団が、一民間の同好の士から作られ、運営している状況は、運営上からは甚だ脆弱な立場におかれているのである。何か大きな経済的損失を蒙った場合は、忽ちにして崩壊の危機に瀕する危険性がないとはいえない。折角これまで二十年をかけて、無から有を築き、世界にまたとない、日本独自のすぐれた音楽集団が育ったのに、それが存亡の危機に陥ることのないよう、経済的基盤を固めることは、さし迫っての急務である。

日本音楽集団の二十年

木村重雄

未知な音響世界の探究と語法のゆきづまりの打開という目的から、作曲家がみづからの足もとをみつめ直したところから出発したのか、あるいは演奏家側が伝統的な作品の再現のみに飽き足らず、同時代性を求めてよびかけたところにはじまったのか、おそらくそれは両者の立場があいまってはたらきかけが生じたのだろうが、今日的な創作を通じて邦楽器と現代音楽が日本でかかわりをもちはじめたのは、一九五〇年代の後半からといってよい。無論、このふたつをパラレルに併存させた、いわゆる〝和洋合奏〟の形態は一九二〇年代から書かれてもいるが、作曲家が創造のためのマテリアルとして邦楽器を主体的に選択し、日常的な作業と同じように五線紙に記された楽譜に邦楽器奏者が挑むという存り方が生じはじめたのが、一九五〇年後半にあたることになる。具体的にいえば、一九五七年秋に〝邦楽4人の会〟が結成され、同じ時期間宮芳生の〈四面の箏のための音楽〉が作曲されている。

そして、一九六二年五月十日には村岡実、横山勝也と宮田耕八朗による〝モダン尺八トリオ〟が第一回演奏会をもち、これが端緒となって一九六四年四月に十四名の同人をもって〝日本音楽集団〟が発足し、同年十一月十七日に第一回演奏会をおこなっている。このグループは単に邦楽器の演奏家たちの集団であるだけでなく、三木稔や長沢勝俊という作曲家であり、同時に理論的な指導者の役割りをはたすひとびとも加わり、運動体としての結合をはかっている。そして、在来は血縁・師弟関係を軸とするタテ社会の構造に組みこまれ、その範囲内における活動にとどまっていた邦楽器奏者たちも、ここではそうした拘束を脱却してアンサンブルへの志向のみにより結束し、音楽集団を構成する有機体のひとつとして活動することにいたる。

創立二十年をむかえた一九八四年までに、〝日本音楽集団〟も八十一回の定期演奏会をおこなっているが、これらを通じて長沢と三木の作品を軸に、多くの作曲家たちへの委嘱をもふくめて邦楽器オーケストラの機能を活用し、あるいはいくつかの楽器のアンサンブルを主体にした多彩な作品を生み出している。それにメンバーに数多くふくまれるさまざまな楽器の名手たちのもつ高度の音楽性や技術が作曲家を刺激し挑発して、その演奏効果を全的に活用した創作を試みていることも、みのがすことはできない。そして〝日本音楽集団〟は殆ど日本全域に及ぶコンサート活動をつづけ、ここではともすれば邦楽器に対してきわめて保守的なイメージしかもちえなかった地方の聴衆に、今日の生きた音楽の担い手としての創造的な価値を改めて認識させた事実も忘れてはならない。

そして、一九七二年のヨーロッパ公演を皮切りに、合衆国、カナダからギリシア、東欧、フィンランド、オーストラリア、ニュージーランド、東南アジア、中国、香港、台湾など十二回に及ぶ海外公演をおこない、現代日本の音楽と、それを支える継続的な表現媒体としての邦楽器についての関心を喚起し、各地に専門的な研究者を育て上げている。

そのうち、とりわけ注目されるのは一九八一年秋の第八次ヨーロッパ公演で、十月八日に開場したライプツィヒ（DDR）〝新ゲヴァントハウス〟の記念コンサートに招かれ、十一月十二日、十三日にクルト・マズア指揮の〝ゲヴァントハウス・オーケストラ〟と三木がそのために書き下した〈急の曲〉を協演のかたちで世界初演したことで、これは一九八三年十月二十七日の同オーケストラ東京公演でも同じかたちにより逆輸入されたが、〝日本音楽集団〟の真価をはっきりとしめしていた。

こうして世界における唯一の邦楽器オーケストラとしての〝日本音楽集団〟は、彼らの質と機能を生かして作曲された音楽とともに広く認められ、国際的にも存在を注目されるに及んでいる。それは、全く無に近い状態から出発して今日に及んだ二十年間にわたる団員たちの努力と精進のしからしむところであるが、おそらく演奏家の世代が大きく交替をせまられることになる次の十年は彼らにとってきわめて重要な時期となるにちがいない。なぜなら、創立メンバーも年齢的な限界に達することになろうし、個人プレーの場合には七〇代、八〇代においてもますます円熟した境地をしめすことになるであろう演奏も、やはり集団であり合奏が基本になるためにも、その担い手の主軸は次の世代に頼らざるをえない。そして、ここ十年間にそうした世代の交替が創立精神の継承をもふくめて順調におこなわれたばあい、〝日本音楽集団〟は二十一世紀音楽の推進者のひとつとして、四〇周年あるいは五〇周年という大きな年輪を刻みこむことになる。二〇周年をむかえるに際して、なにが彼らをして今日あらしめたのかを改めて考え、次の二〇年における飛躍をはたして欲しいと希うのは、おそらく誰しもの心情であろう。

日本音楽集団二十周年に寄せて

〈アイウエオ順〉

昭和四十一年頃か、日仏会館ホールで、この集団の演奏を初めて聴いたときの私の経験した興奮と感激は今でも忘れがたい。すばらしい、これこそは日本音楽の現代的誕生である。是非とも育ってもらいたい、外国人にも聴いてほしい、そのための蔭の力の一端でもかつぎたい、その時の私の卒直な感想であった。創立二十周年を迎えるという。この間の集団の成長と活躍は全く驚くばかりのものであった。関係者の御労苦に敬意を表し、いや高い飛翔を祈ってやまない。

安達健二（東京国立近代美術館館長）

コンサートにも、機関誌にも、いつもこぼれ出るほほえましい稚気に充ちたフレッシュさに「廿周年」と聞いてビックリですが、その活気あったればこそ歩み続けられた廿年であったことでしょう。「集団」のお陰で始めて知り得たこと、始めてできたことの大きさに改めて驚きます。音の ― つまりは人間の可能性を拓きつづけ、その存在そのものが人々を励ますような活動を、今後ますますたくましくされて行くことでしょう。

安達元彦（作曲家）

日本音楽集団が、創立二十周年を迎えられたこと、編成の大小の違いはあるが、国内・海外で同じように、新しい聴衆の開拓をしながら演奏活動をして来た「邦楽4人の会」を代表して、心からお祝を申上げます。

いろいろな面から、私たちの進む道は今まで以上に困難が多いことと思いますが、共に掲げた理想に向って進みましょう。今から三十周年、四十周年のお祝を書くことが楽しみです。今回のコンサートも息の合った素晴らしい演奏を期待しています。

北原篁山（尺八演奏家）

より高く深く

発足当初は継続を危惧されていた日本音楽集団が、二十年の久しきに亘り、超党派的に自由な活躍を続けて我国音楽界に多大の貢献をなし得たのは、ひとえに複数の優れた指導者と団員各位の一致団結、努力精進の賜であると思います。人間でいう成人の年を迎えるにあたり、更に一層の進歩発展、成長をめざして厳しい修錬、精励の限りを尽くされんことを切願してやみません。

おめでとうございます。

杵屋正邦（作曲家）

現代では一つの産業が興ってから、最盛期を過ぎて哀える迄のサイクルは約三十年年といわれる。石炭、織物がそうであり、次は自動車かな。もちろん芸術運動は産業とはちがうが、集団が発足して二十年たった今、十年後に解散していないとは誰もいいきれない。そうでなくても初心を失って、ただの組織的な家元に堕落しているかもしれない。集団を既成の価値観として参加して来た若い諸君は、特に心してもらいたい。常に新鮮で、はらはらするような運動を続けてほしい。

鞍掛昭二（日本福祉大学教授）

この二十年間、つねに新しくありつづけた日本音楽集団に心からお祝いを申しあげます。私もいっしょになって感動し、応援し、また刺激を受けつづけてきました。その歴史を大きく支えてきたものに、女性の力があったということを、とくに一言そえたい気持です。

女性の社会的、精神的自立が、現代邦楽運動にあっては、まさに創造の原動力として作用していると思うからです。これからも多くの夢を叶えてくれるにちがいない皆さんに、感謝とよろこびの拍手を送ります。

小宮多美江（音楽評論家）

日本の現代邦楽の分野で日本音楽集団が先進的な活動を果たして来られたこの二十年の歩みに対して心から敬意を表したいと思います。この間に種々な御苦労のあったこととは思いますが、これからも創作と普及の両面にわたって、良い作品を生みながら、ひろく聴衆の求めているものに応えてゆかれること、その二つの点に十分に留意をおこたらず活動を拡げて下さることを強く念願してやみません。

佐々木光（音楽旬報）

今や一つの潮流として燦然と音楽史上に位置づけられる日本音楽集団。この貴重な文化的価値を生みだし、これを磨き上げ、支えてこられた方々の二十年に、心から敬服し、拍手を送り、さらにアンコールの声を届けます。

そして、その皆さんと友情をもち続けることができた一人であることの嬉しさを、今また格別な感慨で味っております。

佐藤敏直（作曲家）

おめでとう。はやいものですね、もう二十年になるのですか。創立の時のあの熱っぽい雰囲気がつい、最近のことの様に思われます。三木さんの「古代舞曲によるパラフレーズ」前奏曲の頭の弾き出しの部分、まったくゾクゾクする様な感動でした。長沢さんの「子供の為の組曲」の五章の力まかせの演奏、なつかしい想い出です。音楽集団はいつも若く、実験的であこがれのチームであってほしいのです。去っていった人達にも……

杉浦弘和（三味線演奏家）

二十年近く前、KBSで働いていた私ははじめて「集団」と出会ったのです。在京の外国人のための演奏会の時の聴衆の感動を今も想い浮べます。集団はその後、海外でたびたび演奏活動をすることとなり、またスイスロマンド交響楽団のアンセルメや、メニューインのような巨匠たちとの対話をもつこととなったのです。

今後も集団のお仕事が国境を越えて世界中にひろがって行くことを心から願って止みません。

鈴木一郎（津田塾大学教授）

日本音楽集団によって始めて日本音楽の素晴しさを知りました。同じような人がぼくの周囲に増えてきました。今後ますます増えるでしょう、増えて欲しいと心から願っています。そしてその為にお手伝いできることがあればできるだけのことをしたいと思っています。もう二十周年を迎えられるのですか！

おめでとう！色々とご苦労も多かったことでしょう。しかし、明かるい未来は約束されています。次の演奏会が楽しみです。どんな素晴しいものを聴かせて戴けるか。

瀧沢　修（俳優―劇団民芸）

二十周年おめでとうございます。欧米では邦楽器の研究が盛んだときましたが、邦楽器を現代音楽として生かした日本音楽集団の功績には絶大のものがあります。そればかりでなく邦楽自体としても独奏楽器としてばかりでなくこれまでになかった魅力ある楽器の構成をもって新しいレパートリーを次々に拡大して世界の音楽の歴史に大きな貢献をしたことは特筆すべきことであり心から賞讃を惜しまないものです。二十周年を楔機として一層の進展を望みます。

土田貞夫（音楽美学）

日本音楽集団が成人式を迎える。二十年―。芸術家という個性あふれる人間の集団でよく持ったと思う。余程、目的意識が強くなければ誤解する。伝統的な日本音楽をどう今日に蘇らせ息づかせるか、その目的を絆に手をとり合ってきたのだろう。伝統芸術は、例えば和歌から連歌が、連歌から俳諧が、俳諧から発句が生れたように生成発展するから価値がある。私は芸術は土だと思う。今日、このように世界が小さくなった時、土から生れ育ったものほどより国際的になっていく。だからこそ日本音楽集団の評価が世界で高いのだ。

更に強い絆でこの運動を続けていっていただきたい。

寺崎裕則（演出家）

もろもろのむずかしい問題をよく克服し、ガマンしてここまでやってこられた集団の一人ひとりの方に敬意を表します。こうして出来あがってゆくものだからこそ、アンサンブルは貴いのでしょう。これからも、さらに大きな人間的感動を喚び起す、高く深いアンサンブルを聞かせてくださることを創立以来のファンの一人として心から期待しております。

戸井昌造（画家）

ほんとうに御目出度う存じます。

いつもお世話になってばっかりで―集団との仕事では、いずれも、意味も意義も有る大切な、そしてまた自分の糧となることをさせていただき、感謝とともに忘れることが出来ません。

日本の楽器による作業という、放っておけばそれだけで保守的になりがちなことを、あくまでも前向きに、未来を目指して進む集団の姿勢と方向が、いつまでもアグレッシヴで革新的でありますよう希いつつ。

友竹正則（声楽家）

私の祖母は三味線の達人だった。私の母は琴をこよなく愛し、私が母の胎内にいた頃、日夜やさしい琴の音をかなでていたという。

私はクラシックからスタートしてジャズをやり、ポピュラーの世界で仕事をして来たが、音を感じる血の中には、我知らずの内に日本古来の楽の音にひかれていったのも、当然の事だったと思える。

日本音楽集団との出会いは、私にとって無上の喜びであり、何時の日か私の作品も貴団によって演奏されて欲しいと願っている。

中村八大（作曲家）

「伝統楽器を荒々しく捉えた」という三木稔氏のことばに象徴されるような、戦闘的でフレッシュな精神で出発した日本音楽集団は、その後の発展、成熟の時期をも含めて、常にそれぞれの局面における芸術状況の最良の担い手のひとつとして、私たちを鼓舞し続けました。今願うことは、その火を消さぬことでなく、哀えさせぬことです。消さぬことはやさしい。しかし長く続かせる事こそが願いなのです。

長尾一雄（音楽評論家）

日本音楽集団の二十年は日本の音楽史の中で特筆されねばなりません。団員の熱意と努力と創意に拍手を贈りたいと思います。

広瀬量平（作曲家）

創立二十周年、おめでとうございます。

現代邦楽の歴史の中で、日本音楽集団が果した役割ははかり知れない大きなものがあります。しかもグループ活動というむづかしさを乗り越えて。ここに二十年をむかえられたことは団員諸氏のたゆまぬ熱意と良識の結晶でしょう。心からの拍手を贈ります。

どうかますます高く広い視点に立って現代日本の音楽創造の旗手となって明日の扉を開いて下さい。

牧野由多可（作曲家）

日本音楽集団の二十周年を心から御祝い申上げます。高田馬場の拙宅で狼煙を上げてはや二十年も経ったのですか。正に光陰矢の如しですね。その間集団の皆さんのたゆまぬ御努力が実って今や世界中にその名を知られるまでにめざましい発展を遂げられ、誠に感無量、嬉しき限りです。将来へ向けての内容のありかた、運営など、かなりむずかしい面にも対処せざるを得ないことと思いますが、どうぞ頑張って下さい。私も、自然吹奏法の普及、演奏に全力を投球中です。

村岡実（尺八演奏家）

その昔、村岡実氏が和楽器だけで新しい音を作ろうと三木稔氏と協力され、グループの名を音楽集団にしようという話になりました。当時は集団カゼとか集団中毒とかいう言葉が流行していて、奇異な感じがしない訳ではありませんでした。二十年、短いようで長い日々の大変なご苦労のつみ重ねを思うとき、あらたに深い感慨をおぼえます。今よりさらに、広く多くの人々に愛される集団に発展されますよう応援しております。

二十周年おめでとうございます。

山内喜美子（箏演奏家）

わすれもしないあの日。一九六五年十月十五日朝日生命ホールで……。期待と緊張の中で始まった三味線の音。不思議な甘い陶酔……、そして徐々に激しく唸りだした日本の楽器たち。「日本楽器のための前奏曲」初演の電撃的なショックはあまりにも強烈でした。それは集団の人々が、日本の楽器たちを眠りから覚めさせたのか、集団の生まれ出ずる声だったのか……。

あれから二十年、もっと逞しく大きな翼をはばたかせ、諸外国での評価を糧に、もっと多くの日本の人々を目覚めさせてくださるよう切望します。

（一ファンN女史より）

☆秋にも多くの方々からメッセージを頂く予定です。

特報!! 秋にヨーロッパ公演

――日本音楽集団第十三次海外演奏会――

日本音楽集団では、第十三次海外演奏会として、四度目のヨーロッパ公演を計画し、秋に旅立ちます。

九月二十三日に出発し十月二十日に帰国するまで、現在の予定では、初公演地ソ連を含む三か国（他に東ドイツ、フィンランド）六都市（レニングラード、モスクワ、ライプチッヒ、エルフルト、ベルリン、ヘルシンキ）で十三回の演奏会が組まれています。このうち「急の曲」（三木稔）上演が六回あり、三度目の共演となるクルト・マズア指揮ゲヴァントハウス管弦楽団とは、ライプチッヒで三回、ベルリンで一回予定され、ヘルシンキではペルティ・ペッカネン指揮ヘルシンキ・フィルハーモニックオーケストラと二回共演することになっています。

〈参加メンバー〉

笛／西川浩平　尺八／三橋貴風、福田輝久、竹井　誠、米澤　浩
三味線／太田幸子　琵琶／半田淳子　太棹／坂井敏子　箏（二十絃・十三絃・十七絃）／吉村七重、花房はるえ、木村玲子、滝田美智子
打楽器／黒坂　昇、細谷一郎、目黒一則
指揮／田村拓男　プロデューサー／三木稔

◆定期演奏会の記録（上）

回	日付・会場	曲名・作曲者等		指揮・客演
1	一九六四・一一・一七 第一生命ホール （芸術祭参加）	尺八三重奏曲 清瀬保二	千鳥の曲 二代吉沢検校	指揮・横山千秋 客演・東京混声合唱団
2	一九六五・一〇・一五 朝日生命ホール （芸術祭参加）	日本楽器のための前奏曲 三木稔 （初演）	子供のための組曲 長沢勝俊	弦と日本楽器のための協奏曲 三木稔（初演） オーボエと日本楽器のための断章 元橋康男（初演） 子供のための組曲より 一・四・五章 長沢勝俊	協奏三章「京琴」 元橋康男 （初演） 三つの阿波のわらべ歌 三木稔 二面の箏のための音楽 入野義朗	子供のための組曲 長沢勝俊 （初演） 愛の架け橋 長沢勝俊 （初演） 二つの牧歌 三木稔 （初演）	くるだんど 三木稔	指揮・横山千秋 客演・吉水洋（Ob.）木村宏子（Alt.）山本邦山（尺八） 日本合唱協会 向山栄一郎（笛） 指揮・横山千秋
3	一九六六・六・一一 日仏会館ホール	箏と三絃のための 二重奏曲 杉浦弘和	本曲「下り葉」 津軽根笹派所伝	詩経より「緑衣」 船川利夫 （初演）	笛と琵琶・小鼓とによる「対話」 笛・向山栄一郎 琵琶・山田美喜子 小鼓・清水義矩	古代舞曲による パラフレーズ 三木稔 （初演）	指揮・横山千秋 客演・豊雄秋（笙）中川とよ子（唄）増田睦実（Sop.） 小沢弘子（朗読）
4	一九六六・一〇・二四 第一生命ホール （芸術祭参加）	組曲「人形風土記」 長沢勝俊 （初演）	古代舞曲による パラフレーズ 三木稔	笛・向山栄一郎 締太鼓・田村拓男 祭太鼓・清水義矩	子供の四季 長沢勝俊	指揮・秋山和慶 客演・増田睦実（Sop.）池田明良（Bar.） 東京荒川少年少女合唱隊
5	一九六七・六・二六 日仏会館ホール	管弦楽組曲第二番より バッハ～集団編曲	六重奏曲 伊藤隆太	組曲「面」 元橋康男 （初演）	三群のための形象 三木稔 （初演）	三絃と日本楽器によるディヴェロプメント 長沢勝俊 （初演） 三絃・杉浦弘和	指揮・横山千秋 客演・芝祐靖
6	一九六七・一一・七 日仏会館ホール （芸術祭参加奨励賞）	尺八・三絃および二面の箏のための四重奏曲 間宮芳生	尺八のための コンポジション 元橋康男 尺八・宮田耕八朗	日本楽器のための 二つの楽章 元橋康男 （初演）	組曲「人形風土記」 長沢勝俊	前奏曲第一集より 亜麻色の髪の乙女 吟遊詩人 ドビュッシー～三木稔	古代舞曲による パラフレーズ 三木稔	指揮・横山千秋 客演・芝祐靖（竜笛） 瀬山詠子（Sop.）
7	一九六八・一一・一三 朝日生命ホール （明治百年記念 芸術祭参加）	尺八三重奏曲 清瀬保二 尺八・宮田耕八朗 古賀将之 横山勝也	トルソ 広瀬量平	三つの断章 中能島欣一 箏・宮本幸子	日本楽器による 〈コントラスト〉 堀悦子（委嘱初演）	日本民俗詩より 「恋の歌」 長沢勝俊 （初演）	箏四重奏曲 長沢勝俊 （初演） 箏・白根きぬ子 坂井とし子 野坂恵子 十七絃・宮田幸子	はばたきの歌 三木稔 （初演）	指揮・横山千秋 客演・日野てる子（Alt.）荒木宏明（Bar.）芝祐靖（竜）日本合唱協会 尾崎太一（打）
8	一九六九・六・一〇 朝日生命ホール	箏のための組曲 石桁真礼生	箏・坂井とし子 白根きぬ子 十七絃・宮本幸子	詩曲 ―独奏尺八のための― 長沢勝俊（初演） 尺八・宮田耕八朗	ディヴェルティメント 佐藤敏直 （委嘱初演）	四群のための形象 三木稔	三絃と日本楽器のためのディヴェロプメント 長沢勝俊 三絃・杉浦弘和	序の曲（初演）三木稔 尺八・横山勝也 二十絃箏・野坂恵子 太棹・坂井とし子	子供のための組曲 長沢勝俊	指揮・横山千秋 客演・岩本忠生（Vc.） 芝祐靖（竜笛）
9	一九六九・一〇・三一 朝日生命ホール （芸術祭参加）									指揮・横山千秋 客演・沢井忠夫（箏）山本邦山（尺八）東京ソリステン 荒谷俊二（指揮）

回	日付・会場	曲名・作曲者等	指揮・客演
11	一九七〇・四・二二 朝日生命ホール	三本の尺八のための ソネット　三木稔 尺八・古賀将之 宮田耕八朗 横山勝也	指揮・田村拓男 客演・中村義春（Bar.）　菊地洋子（M.Sop.） 佐藤英彦（打）沢井忠彦（箏） 八村義夫（指揮）
	一九七〇・一〇・一九 都市センターホール （芸術祭参加）	三本の尺八のためのス ペース　仲俣申喜男 尺八・古賀将之 坂田宏聰 宮田耕八朗	指揮・田村拓男　山田一雄 客演・坂田宏聡（尺八）芹沢英雄（打） 雨宮靖和（打）川崎祥悦（P） 東京放送合唱団
12	一九七一・六・二 都市センターホール	しがらみ第二 八村義夫	指揮・田村拓男
13	一九七一・九・二七 大阪厚生年金会館中ホール （第一回関西定期）	松尾芭蕉の四つの 俳諧「幽」 H・J・コルロイター	指揮・田村拓男 客演・増田睦実（Sop.） 中村義春（Bar.）
14	一九七一・一一・一〇 都市センターホール （長沢勝俊作品集）	二つの舞曲　長沢勝俊 箏四重奏曲 箏・白根きぬ子 坂井とし子 野坂恵子 十七絃・宮本幸子	指揮・田村拓男　山田一雄 客演・羽賀幹子　吉川富子　藤田都志　砂崎知子 中丸春美　鍔本和子　徳本尅子　蔵本エリ子 高橋明邦　谷珠美（うた）大賀寛（うた）
15	伝統音楽しりーずI 一九七一・一一・二〇 日仏会館ホール	鹿の遠音　尺八本曲 尺八・横山勝也 宮田耕八朗	指揮・田村拓男 客演・赤木直明（長唄） 中島勝裕（三味線） 藤舎成敏（太鼓）
16	一九七二・六・七 都市センターホール	四群のための形象　三木稔 千鳥の曲　吉沢検校 唄・本手・白根きぬ子 替手・宮本幸子	指揮・田村拓男 客演・芝祐靖（竜笛） 岡田知之（打） 客演・宮田常男（長唄） 赤木直彦（長唄） 藤倉修一（長唄） 鈴木勘容（三味線） 中島勝裕（三味線）
	伝統音楽しりーずII 一九七二・七・五 青山タワーホール	日本民俗詩より 「恋の歌」　長沢勝俊 天如　三木稔 二十絃箏・野坂恵子 和楽器のための三重奏 曲より　I II III 小山清茂 箏・白根きぬ子 二十絃箏・野坂恵子 十七絃・宮本幸子 孤響―独奏尺八の ための―　三木稔 尺八・横山勝也 詩曲 ―独奏尺八のための― 尺八・宮田耕八朗 二つの尺八のためのアキ 広瀬量平 尺八・横山勝也 坂田宏聰 箏・笛・笙による 〝無依の咏〟 石桁真礼生 敦盛 琵琶・山田美喜子 半田綾子	指揮・田村拓男 客演・中村義春（Bar.）　菊地洋子（M.Sop.） 佐藤英彦（打）沢井忠彦（箏） 八村義夫（指揮） 指揮・田村拓男　山田一雄 客演・坂田宏聡（尺八）芹沢英雄（打） 雨宮靖和（打）川崎祥悦（P） 東京放送合唱団 指揮・田村拓男 客演・増田睦実（Sop.） 中村義春（Bar.） 指揮・田村拓男 客演・赤木直明（長唄） 中島勝裕（三味線） 藤舎成敏（太鼓）
		民謡群想　若松正司 （委嘱初演） 和楽器による マティエール 田中利光 （委嘱初演） 二十六夜―時間を持たない時間のために― 三宅榛名 （委嘱初演） 能管・望月太八 竜笛・宮田耕八朗 三絃・杉浦弘和 琵琶・山田美喜子 凸―三群の三曲と日本 太鼓のための協奏曲― 三木稔 子供のための組曲 日本民俗詩より 「恋の歌」 五段砧　光崎検校 本手・坂井とし子 替手・白根きぬ子 邦楽器のための 〈コンチェルタンテ〉 仲俣申喜男（委嘱初演） 三津山　光崎検校 唄・三絃・野坂恵子 唄・箏・白根きぬ子 坂井とし子	指揮・田村拓男 客演・中村義春（Bar.）　菊地洋子（M.Sop.） 佐藤英彦（打）沢井忠彦（箏） 八村義夫（指揮） 指揮・田村拓男　山田一雄 客演・坂田宏聡（尺八）芹沢英雄（打） 雨宮靖和（打）川崎祥悦（P） 東京放送合唱団 指揮・田村拓男 客演・増田睦実（Sop.） 中村義春（Bar.） 指揮・田村拓男 客演・赤木直明（長唄） 中島勝裕（三味線） 藤舎成敏（太鼓）
		しがらみ第二　八村義夫 （委嘱初演） 二つの舞曲　長沢勝俊 （初演） 日本民俗詩より 「恋の歌」　長沢勝俊 尺八・箏二重奏曲 「萌春」　（初演） 尺八・坂田宏聰 箏・白根きぬ子 二十絃と十七絃のため の二つのファンタジー 入野義朗 二十絃・野坂恵子 十七絃・宮本幸子 ディヴェルティメント 佐藤敏直 しゃみ猫博士の冒険 杉浦弘和 語り・伊藤惣一 三味線・杉浦弘和 太棹・坂井とし子 琵琶・山田美喜子	指揮・田村拓男 客演・増田睦実（Sop.） 中村義春（Bar.） 指揮・田村拓男 客演・赤木直明（長唄） 中島勝裕（三味線） 藤舎成敏（太鼓）
		日本楽器による 〈コントラスト〉 堀悦子 くるだんど　三木稔 孤響 ―独奏尺八のための― 三木稔 尺八・横山勝也 組曲「人形風土記」 長沢勝俊 二つの舞曲 小鍛治 二代目杵屋勝五郎 凸―三群の三曲と日本 太鼓のための協奏曲― 三木稔 鶴の巣ごもり　古典本曲 尺八・宮田耕八朗 坂田宏聰 勧進帳 杵屋六翁	指揮・田村拓男 客演・中村義春（Bar.）　菊地洋子（M.Sop.） 佐藤英彦（打）沢井忠彦（箏） 八村義夫（指揮） 指揮・田村拓男　山田一雄 客演・坂田宏聡（尺八）芹沢英雄（打） 雨宮靖和（打）川崎祥悦（P） 東京放送合唱団 指揮・田村拓男 客演・増田睦実（Sop.） 中村義春（Bar.） 指揮・田村拓男 客演・赤木直明（長唄） 中島勝裕（三味線） 藤舎成敏（太鼓）

回	日付・会場	曲名・作曲者等	指揮・客演
17	一九七二・九・六 朝日講堂 （渡欧記念演奏会）	子供のための組曲 長沢勝俊	指揮・田村拓男 客演・増田睦実（Sop.）
18	一九七三・一・二四 都市センターホール	六重奏曲 伊藤隆太	指揮・田村拓男 客演・東儀博（篳篥）
19	一九七三・七・三 都市センターホール	ね・とり〈開幕のため のセレモニー〉 三木稔（初演）	指揮・荒谷俊治
20	一九七三・一〇・五 虎の門ホール （芸術祭主催公演）	音取 ね・とり 〈開幕のためのセレ モニー〉より	
21	一九七三・一二・六 大阪厚生年金会館中ホール （第二回関西定期）	ね・とり〈開幕の ためのセレモニー〉 三木稔	指揮・田村拓男 客演・増田睦美（Sop.）
	伝統音楽しりーずⅢ 一九七四・一・二三 梅若能楽院能楽堂	春の宴 鶴田錦史 琵琶・半田綾子	
22	一九七四・五・一四 都市センターホール （創立十周年）	みち―日本楽器による 八人の奏者のための 長沢勝俊	指揮・田村拓男 客演・増田睦美（Sop.） 東京ゾリステン
23	一九七五・二・一八 都市センターホール	序の曲 尺八・坂田誠山 二十絃箏・野坂恵子 太棹・坂井とし子	
24	一九七五・五・二九 都市センターホール	拵 打楽器・藤舎成敏 田村拓男 三木稔	指揮・田村拓男 客演・東儀博（篳篥）
28	一九七五・九・二二 日仏会館 （琵琶楽その一）	とう ローブ・ディヴィッド	構成・山田美喜子 客演・山崎旭萃 黒坂昇 ジョージ・ギッシュ
		薩摩琵琶古典 正絃会	
		須磨の敦盛 筑前・山田美喜子 薩摩・半田綾子	
		平曲―那須の与一― 平家琵琶・ ジョージ・ギッシュ	
		レスポンス 山川園松	
		安宅 筑前・山崎旭萃	

これ以後、「室内楽演奏会」「伝統音楽演奏会」「楽しい邦楽演奏会」を含む「定期コンサート・シリーズ」とし、これまでの「伝統音楽しりーずⅠⅡⅢ」を回数に入れ、ここまでを27回とした。

回	日付・会場	曲名・作曲者等	指揮・客演
		古代舞曲による パラフレーズ 三木稔	
		二十六夜―時間を持た ない時間のために― 三宅榛名	
		鼓譟 田村拓男 （初演）	
		日本楽器のための道遥 入野義朗 （委嘱初演）	
		ダンスコンセルタント 三木稔 （初演）	
		獅子―乱序・狂い 笛・望月太八 小鼓・藤舎成敏 大鼓・堅田啓輝 太鼓・尾崎太一	
		四面の箏のための音楽 間宮芳生 湯浅麻美子 花房はるえ	
		邦楽器のための コンチェルタンテ 仲俣申喜男 （改訂初演）	
		ともし火によせて 芝祐靖	
		板碑のうた ―尺八と弦楽合奏による 長沢勝俊（初演） 尺八・宮田耕八朗	
		笛・望月太八 締太鼓・尾崎太一 祭太鼓・堅田啓輝	
		METAPHOR 柴田南雄 （委嘱初演）	
		竹籟五章 諸井誠 尺八・坂田誠山	
		邦楽器のための シャコンヌ 安達元彦	
		組曲「人形風土記」 長沢勝俊	
		インド旋律による「壁画」 牧野由多可 （委嘱初演）	
		交響的幻想曲 「朱輪金鈴」 長沢勝俊（舞台初演）	
		三絃協奏曲 長沢勝俊 三絃・杉浦弘和	
		秋色種 十代目杵屋六佐ヱ門 唄・今藤文子 三味線・杉浦弘和 野口美恵子	
		三絃協奏曲 長沢勝俊 三絃・杉浦弘和	
		凸―三群の三曲と日本 太鼓のための協奏曲― 三木稔	
		ロマネスク ―十七絃独奏のための 岡田京子	
		佐保の曲・竜田の曲 三木稔	
		二十絃箏・野坂恵子	
		詩と和楽器による 阿波の子タヌキ譚 三木稔	
		砧 生田検校 箏・宮本幸子	
		尺八二重奏曲 佐藤敏直（初演） 尺八・宮田耕八朗 坂田誠山	
		十人の邦楽器奏者 のための音楽 甲斐説宗 （委嘱初演）	
		古代舞曲による パラフレーズ 三木稔	
		影法師 幾山検校 歌・宮藤文子 三絃・坂井とし子	
		鳩のいる風景 佐藤敏直（東京初演） 尺八・宮田耕八朗 坂田誠山	
		古代舞曲による パラフレーズ 三木稔	
		夢十夜 広瀬量平 （委嘱初演）	
		鄂曲鬢多々良 伊福部昭 （委嘱初演）	指揮・田村拓男 客演・芝祐靖（竜）多忠磨（笙）大窪永夫（篳篥）増田睦実（Sop.）中村義春（Bar.）東京荒川少年少女合唱隊
		邦楽器のための シャコンヌ 安達元彦	
		ダンスコンセルタント 三木稔 （エピローグ追加初演）	
		鶴の巣籠り 尺八・宮田耕八朗	
		邦楽器のための シャコンヌ 安達元彦	

回	日付・会場	曲名・作曲者等				指揮・客演
29	一九七五・一〇・一五 朝日講堂 （楽しい邦楽）	わたしのうた うた・小鳩くるみ	日本の楽器のはなし おはなし・柳家小三治	組曲「人形風土紀」 長沢勝俊		構成・田村拓男 客演・小鳩くるみ 柳家小三治
30	一九七五・一二・三 都市センターホール	インド旋律による 「壁画」 牧野由多可	ヤイレスプ―夢が・見せた・わが里― 岡田京子 （委嘱初演）	笛と打楽器のための音楽「颯踏」 長沢勝俊　笛・望月太八 打・尾崎太一 藤舎成敏 （初演）		指揮・荒谷俊治　合唱指揮・関屋晋 客演・金谷良三（Ten.） 松原混声合唱団 湘南市民コール
31	一九七六・一・二八 青山タワーホール （室内楽）	四重奏曲 小山清茂	去来 杵屋正邦 三絃・杉浦弘和	文様Ⅰ・Ⅱ 三木稔	孤響 三木稔 尺八・坂田誠山	さらし幻想曲 中能島欣一
32	一九七六・四・一三 都市センターホール	アンプロンプチュ 阿見悟	SHō-IN 前田行央 （第一回公募作品初演）	二つの舞曲 長沢勝俊	遡河　小田切清光・詩 長沢勝俊 琵琶・半田綾子（初演）	構成・杉浦弘和
33	一九七六・五・一二 青山タワーホール （室内楽）	笛と打楽器のための音楽 「颯踏」 長沢勝俊	無門抄 前田行央	モノトリオ 北爪道夫	萌春　長沢勝俊 尺八・宮田耕八朗 箏・宮本幸子	構成・霜島素子 客演・西義一（Bar.） 荻野昌良（Bar.）
34	一九七六・六・二三 青山タワーホール （地歌・箏曲その一）	新八千代獅子（初演） 藤永検校 日本音楽集団編曲	残月 峰崎勾当 歌・原田茂生	黒髪 杵屋佐吉 湖出市十郎 歌・砂原美智子	奔手 三木稔 三絃・杉浦弘和	構成・野坂恵子 客演・鶴田錦史　砂原美智子 原田茂生
35	一九七六・七・一九 朝日生命ホール （語りと音楽による）	しゃみ猫博士の冒険 秋浜悟史　作 杉浦弘和　作曲	アジアの音楽から 牧野由多可 三木稔　編曲 長沢勝俊	竹取物語 海津勝一郎　作 長沢勝俊　作曲 （初演）	屋嶋を素材とする即興 的変容 藤尾勾当 歌・鶴田錦史	吾妻獅子 峰崎勾当
36	一九七六・一〇・四 日仏会館 （尺八と外曲の系譜）	菅笠節 一節切・宮田耕八朗 唄・杉浦弘和	末の契り 松浦検校	比良 宮城道雄	古典の技法 藤井凡大	凸―三群の三曲と日本 太鼓のための協奏曲― 三木稔
37	一九七六・一二・一七 中央会館 （かぐら一九七六 三木稔作品）	神迎えの音取	星界の報告 （初演）	巨火（ほて） （初演）		指揮・田村拓男 客演・増田睦実（歌）友竹正則（歌） 森田守恒（踊り）伊藤惣一（語り） 春秋団
38	一九七六・二・一三 虎ノ門ホール （楽しい邦楽）	加藤登紀子とともに		フォルクローレをたずねて		構成・三橋貴風 客演・加藤登紀子 指揮・田村拓男　稲田康
39	一九七六・三・二四 青山タワーホール （室内楽）	箏のための組曲 石桁真礼生	小品集 （拷・曲・ソネット） 三木稔	箏四重奏曲 長沢勝俊	風紋 牧野由多可 箏・砂崎知子	太棹協奏曲 牧野由多可		構成・砂崎知子 客演・鶴沢清治（太棹）

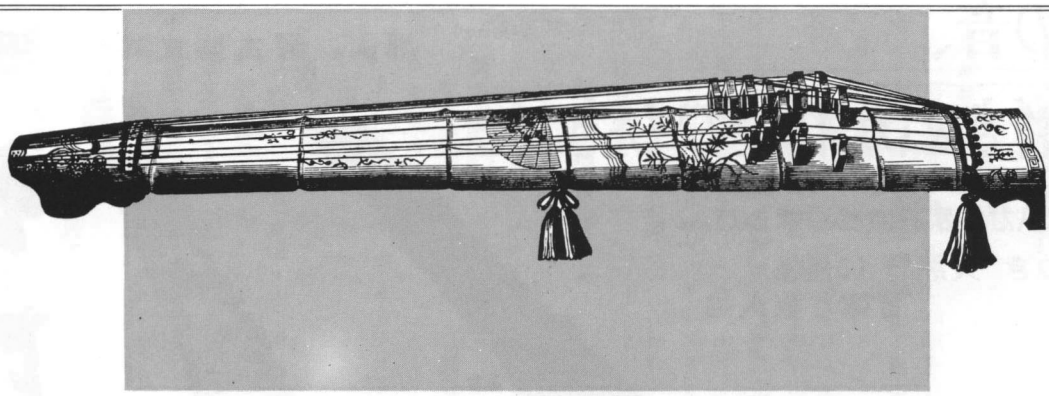
※つづきは秋のプログラムに掲載します。

第一回定期演奏会を目ざして合宿した、創設時メンバー（雑誌「音楽生活」昭和39年７月号より転載）

1971年、初めての地方公演で徳島を訪れ、鳴門海峡を臨む

1972年、劇団三十人会のけいこ場でのクリスマス・パーティで

1968年、指揮者、故アンセルメ氏の訪問を受ける



日本音楽集団20周年をお祝い申し上げます。

伝統に便利さを加えて——当店のすべての商品にクレジットがご利用になれます。

琴光堂和樂器店

松本店　長野県松本市大手４—12—９　TEL 0263—32—3255
諏訪店　長野県諏訪市城南１—2562—６　TEL 0266—52—2341
東京店　東京都目黒区碑文谷２—19—15　TEL 03—792—8481

露秋銘 尺八

西　田　露　秋

〒794 今治市新谷新田甲７９８
電 話 0898-48-1097・1257

日本の音、
その磨きぬかれたひびき

都山、琴古型式共

☆銘木尺八が生まれかわりました。
曲りがつき 天然竹 に優る
音律と耐久性

品番
0152
楓

標準価格
1.8尺 ¥22,000円

品番
0153
合竹

標準価格
1.8尺 ¥40,000円

新発売！

歌口黒水牛角入
一本一本製管調律
手造の味（1.3尺～2.3尺まで）

㈱ワダ楽器
富山県東砺波郡城端町信末
TEL（0763）62-2348

実用新案出願中

WAS

お肌に、やさしい自然のいたわり…

①スキンローション	120ml	¥6,000
②スキンミルク	120ml	¥6,000
③ホワイティ・スペシャル	40ml	¥12,000
④オイリー・スペシャル	40ml	¥12,000
⑤モイスチュアクリーム	40g	¥8,000

ちょうど自然食品が見直されてきてからでしょうか。私たちの身の回りのさまざまなところで、自然回帰の傾向が強まってきました。〈WAS〉化粧品は、完全な自然の原料を使用したピュアな自然基礎化粧品です。毎日のお手入れに、うるおいのある素肌づくりにおすすめします。

販売特約店募集中
詳しくは当社担当まで

株式会社インターナショナルウオーク社
化粧品事業部
〒170 東京都豊島区東池袋1-48-10
25山京ビル311
TEL988-9115

Time Processor

時代をリードする就業管理用コンピュータ

（TP-400）

○入・退時刻管理による就業管理機です。
○入・退勤・私用外出・残業・精・皆勤などの基礎データを記憶しスピーディに集計・給与支給額の算出をします。
○月給・日給・時給の社員別に目的に合った集計を行いますので管理・集計作業が迅速・正確・簡便です。
○1ヶ月間の日次データ・勤怠内容を記憶します。
○30人用・60人用・90人用の3タイプがあります。

※リース契約も受付ておりますのでお気軽にご相談ください。

販売特約店募集中
詳しくは当社担当まで

株式会社インターナショナルウオーク社
販売事業部
〒170 東京都豊島区東池袋1-48-10
25山京ビル311
TEL 988-9117

邦楽現代ニュース

日本音楽集団一九八三年度後半の主な活動記録

十月五日(水)
第七十九回秋の総合定期演奏会 ― 長沢勝俊作品特集　朝日生命ホール

十月十七日(月)～二十二日(土) 富山県巡回学校公演

十月二十七日(木)
ゲヴァントハウス・オーケストラ東京公演の三木稔作曲〈急の曲〉に出演　昭和女子大人見記念講堂

十一月五日(土) 半田公演　半田勤労福祉会館

十一月六日(日)
ゲヴァントハウス・オーケストラ〈急の曲〉に出演　愛知文化講堂

一九八三年度地方公演（文化庁助成）

十一月七日(月)
岐阜／岐阜産業会館

十一月八日(火)
和歌山／和歌山市民会館小ホール

十一月九日(水)
第九回関西定期演奏会　京都府立文化芸術会館

十一月十日(木)
ゲヴァントハウス・オーケストラ神戸公演の〈急の曲〉に出演　神戸文化ホール大ホール

十一月十一日(金)
ゲヴァントハウス・オーケストラ徳島公演の〈急の曲〉に出演　徳島市立文化センター

地方公演つづき

十一月十二日(土)
高松／高松オリーブホール

十一月十三日(日)
岡山／岡山市民文化ホール

十一月十四日(月)
今治／今治市住民センター

十一月十五日(火)
宇和島／宇和島公会堂大宮ホール

十一月十六日(水)
姫路／姫路市民会館

十一月十六日(水)～二十六日(土) 岐阜巡回学校公演

十一月二十五日(金)、二十六日(土)
CBSソニー「ヨーヨー・マ日本を歌う」レコーディングでヨーヨー・マと共演

十一月二十六日(土)、二十七日(日)
合唱劇〈峠の向かうに何があるか〉(三木稔作曲)　名古屋芸創センターこけらおとし公演で再演

十二月二日(金)
第八十回定期演奏会 ― 中国音楽との出会い　芝ａｂｃ会館ホール

十二月十一日(日) 七尾公演　七尾市民会館

十二月十五日(木)
富士見中学鑑賞会　川崎産業文化会館

一月十五日(日)
茅ヶ崎市成人式記念式典出演　茅ヶ崎市民文化会館

一月二十日(金)
東星学園鑑賞会

一月二十七日(金)
第八十一回定期演奏会 ― 伝統楽器のさまざまな魅力　芝ａｂｃ会館ホール

二月二十九日(水)
研究団員コンサート　方南会館

三月十二日(月)～十七日(土)
第十二次海外公演（台湾 ― 台北、高雄）

三月二十二日(木)
宇都宮公演　宇都宮市文化会館

四月十二日(木)
栃木県大平町コンサート　大平町西公民館

四月二十日(金)
新星日本交響楽団第七十三回定期演奏会の〈急の曲〉に出演（指揮・井上道義）　東京文化会館大ホール

台湾演奏旅行に参加して

半田淳子

昨年の三月には中国大陸（北京・上海）、そしてはからずもその一年後に台湾の方へも演奏活動の足をのばす事が出来たのはうれしい事であった。

三月十二日の朝八時四〇分、演奏者七名と事務局長奈良を加えた一行八名は、成田に集合した。その日、日本アジア航空EG201便は、満員のせいもあり二名分だけファーストクラスがあてられた。尺八の坂田と私は、今回のメンバーの中では、シルバーシートに座る権利があるらしく、ファーストクラスに乗せられた。しかし何はともあれ私達だけ十分豪華な気分を味わわせていただいたのは申し訳けない事であった。ゆっくりとフルコースのお食事も終り、ワインの酔いもまわってゆったりとした座席に十分足を伸ばしてくつろぎ、快適な四時間を味わって無事に台北に到着した。島の中央を北回帰線が走り北半分が温帯、南半分が熱帯に属すという台湾は、もう初夏であった。

空港には国楽団の団長さんである陳暾初氏、副指揮者の李時銘氏、交流協会の森川博文氏らが出迎えて下さり、バスですぐホテルへ。私達が演奏する会場は、台北市立社会教育館文化活動中心（センター）という立派な建物で、通称、社教館と呼んでいるが、一階が千二百人程度収容できるホールになっており、六階に国楽団と交響楽団の事務所や練習室がある。その日は、四時から国楽団の会議室で記者会見が予定されており、チェックインをすませて少し休んだあとバスですぐ会場に向った。台北一流紙の中央通信社、ラジオ放送局、中央日報連合報の方々が見え、音楽集団側は奈良がまずプログラムを見ながらメンバーを紹介した。そのあとは質問形式に入り団員の数や、楽器の種類、編成、音楽の内容等、さまざまな集団の事を知りたい、理解したいという熱のこもった記者会見であった。

夜は「福星」という四川料理のお店で交流協会主催の歓迎会があり、野崎総務部長と森川氏が歓待して下さった。中国ではさかんに茅台酒（マオタイ）が、飲まれていたがここでは紹興酒にレモンをふんだんに入れたのが出され、皆おいしいお料理とさっぱりしたレモン入りの紹興酒に、舌つづみを打ち野崎部長の体験談を聞きながら十分に満足したお腹をかかえてホテルに引き上げた。

翌十三日は午前中、国楽団の会議室と練習室を借りてそれぞれの練習に入った。この様な練習室がある事は全く羨ましい限りである。みなそれぞれがおちついて十分に練習が出来たし、又この旅全体を通して楽器の運搬やすべての手配が素晴らしかったので、私達演奏者にとってこんなに楽な旅はめったにない事であった。お昼は空軍官兵活動中心という建物の一室を借りて国楽団の団長主催の昼食会があり二時から会場でリハーサルを開始した。四時まで集団側のリハーサルをやり、いったんホテルに戻って少し休み六時半に会場入りした。台北でのコンサートは、十三日、十四日とも前半が台北市立国楽団、後半が日本音楽集団という形の演奏会であった。

台北の国楽とは私達にとっては、中国のそれと同じ様な感じであったがこちらでは民俗楽器専門の店がありそこで楽器も製作し、会場が大きくなるに従って音量を大きくする工夫とか、機能的にも西洋音楽の様にやっているとの事だった。民俗音楽を教える学校として、文化大学があり、又もう一つには中学を卒業してから行く国立台湾芸術専科学校という五年間勉強する専門学校がある。そこを卒業すると大学の二年生に編入試験を受けることも出来るそうである。一般的には西洋音楽をやっている人の方が多いが、最近は政府が国楽をやる様に勧め、養成しているのでかなり国楽をする人が増えてきており、曲目等も大陸各省の伝統的な曲を編曲したり、新らしい曲を作曲したり、外部に委嘱したりしてレパートリーをひろげている。団員は毎週月曜から土曜の午前九時から十二時まで楽団に通い、午後は家に帰って練習する。そして中学校の先生と同じ位のお給料をもらいそれ以外の収入を得るためには公務に支障のないようなアルバイトならしても良い。ちなみに平均年令は26才、停年退職は65才という事である。

国楽団の演奏は一時間にもおよんだので、演奏会が終了したのは十時をまわっていた。力いっぱい演奏した後の熱気が会場にただよい、交流協会の所長も見えて大変喜んで下さった。

二日目の演奏終了後、「兄弟飯店」という所で、打ち上げパーティーがあった。それぞれの国の音楽の事や、楽器の話、練習の様子など、さまざまな話題がとびかい交流協会の森川氏は、食事をとりながら通訳もしなければならないので、大変忙しくお気の毒であったが、御本人も「僕も勉強になるなあ」と言って楽しそうにやって下さったのにはうれしかった。又、長沢勝俊作曲の〈冬の一日〉が大変人気があり それにあった楽器があれば、こちらでも演奏してみたいと副指揮者の李氏が言っておられた。中胡を演奏したソリストの陳淑芬さんは、三木稔作曲の〈秋の曲〉が大変気に入って、自分も演奏してみたいとの事で、尺八の坂田がその譜面をプレゼントするという場面もあってなごやかなうちに相互の交流が十分になされ、とても有意義な一夜であった。

十五日は午前中、観光をする事になり、中正紀念堂と故宮博物館にバスで案内していただいた。建国の父孫文の生誕百年を記念して建築された中正紀念堂は公共建築として、台湾第一の規模を誇り三民主義を唱えた孫文の一生を示す資料が展示されていた。台湾観光の筆頭にあげられる故宮博物館は、美術品、文献およそ62万点が収蔵され中国五千年の文化の集大成ともいえる規模で、歴代王朝の秘蔵していた傑作がその中心となっている。館内は撮影禁止・禁煙となっており入口の脇にはク

ロークがあり、カメラや大きなバックはそこに預ける様になっていた。できれば一日ゆっくり時間がほしかったが、午後高雄に移動しなければならないので、かけ足見学であった。奈良は途中から楽器確認のため、社教館へ行き、私達も見学のあと社教館により、奈良をひろって、市内のレストランで昼食をとり、そのあと楽器店にも立ち寄るというめまぐるしい日程であったので、私は少し疲れが出てきてこの辺から健康状態があまりよくなかったが、なんとか保ちながら一行は急いで空港へと向った。最後までつきあって下さった国楽団のメンバー達とも名残りを惜しんで一路高雄へと旅立った。

中華航空CI279便は午後四時五十分無事に高雄に到着した。空港には交流協会高雄事務所の高橋さんが出迎えて下さり、すぐに金世界大飯店（キングプラザホテル）に案内して下さった。ホテルは台北・高雄とも大変良いホテルで、特に高雄のキングプラザホテルは広すぎるお部屋に皆シングルで入り、ゆっくり体を休める事が出来た。その夜六時から交流協会所長主催のパーティーがあったが、私は昼間の疲れもあり、明日の事を考えて失礼させていただいた。

十六日、昨日の疲れもすっかり取れ、さわやかな気分で目覚めた。高雄公演の本番の演奏会場は高雄市中正文化中心というところであった。ここでは音楽集団のみの演奏会であったので、午前中会場を下見したあと、十分時間があり、それぞれの練習も出来たし全体のリハーサルもうまくいっていた。会場の音響は、十分良いとはいえなかったけれど五百人程度のホールだったのであまり心配はなかった。高橋さんが日本風幕の内弁当を注文して下さり、梅干、日本茶、食後にオレンジ等を用意して色々気を使って下さり、演奏前の気分をやわらげて下さった。

プログラムは後に記すが、日本の古典音楽紹介の意味も含めて「獅子」から入り、音楽集団を代表する二人の作曲家、長沢、三木作品でその夜のコンサートを十分に盛り上げることが出来た。その夜は八名だけで打ち上げということになって「梅子飯店」というお店を紹介してもらったのであるが、交流協会の高橋さんと、張氏が心配してついて来て下さり合計十名で台湾料理をかこみ、例の紹興酒で最後の夜を楽しんだのであった。

最終日十七日は午前中、自由に高雄の町を散策したり、買物をしたりして過ごした。人口約130万、台北につぎ台湾第二の大都市で工業都市としてめざましい躍進を続けている高雄市内はゆったりとした都市計画で作られ、台北の町よりむしろきれいで整然とした感じがあった。もう一日時間があったらゆっくり観光も出来たであろうと思うと、その点だけが心残りであったが、またの機会に楽しみを残して、12時ホテルを出発し、一行は高雄国際空港へと向い、13時40分EG278便にて無事成田に帰国した。私達の留守中東京は二度も雪が降ったそうで、帰国した日も寒く、夏から冬へ逆戻りで、体温の調節がきかずまごついたが、風邪もひかないで、皆元気だったのは、本当に幸いであった。

■ **演奏曲目**

長沢勝俊作品――冬の一日・パートII、二つの三味線と小鼓による三章、萌春

三木稔作品――ダンス・コンセルタントIII、わ、秋の曲

古典及びその他の作品――行（佚谷晃一作曲）、獅子、扇の的、五段砧

■ **参加団員**

尺八／坂田誠山　　箏／宮越圭子
笛・尺八／藤崎重康　　箏／木村玲子
琵琶／半田淳子　　打楽器／藤舎成敏
三味線／加藤洋　　事務局長／奈良義寛

故宮博物館にて国楽団のメンバーと

日本音楽集団及び団員等の今後の予定

五月十六日(水)
第八十二回春の総合定期演奏会　朝日生命ホール

五月二十五日(金)、二十六日(土)
三木稔作曲オペラ〈あだ〉日本初演　新宿文化センター

六月十一日(月)
第八十三回定期演奏会　芝ａｂｃ会館ホール

六月十八日(月)～二十七日(火)
文化庁助成北日本地方演奏会（内容は次頁）
札幌市教育文化会館大ホール（十八日）
旭川市民文化会館（十九日）
下川町公会堂（二十日）
苫小牧市文化会館（二十一日）
長万部町福祉センター（二十二日）
函館市民会館（二十三日）
青森市民文化ホール（二十六日）
岩手県民会館中ホール（二十七日）

六月二十日(水)
北鎌倉女子学園鑑賞会

六月二十九日(金)
柏朋会「愛のコンサート」に出演　郵便貯金ホール

六月三十日(土)
「つくばコンサート」で日本音楽集団演奏会　筑波研究学園都市　ノバホール

七月六日(金)
第八十四回定期演奏会　芝ａｂｃ会館ホール

七月二十日(金)
田嶋直士尺八リサイタル　大阪・森の宮ピロティホール

七月二十三日(月)～二十五日(水)
第九回現代胡弓研究会主催夏期講習会　琵琶湖いこいの村

七月二十八日(土)
美濃公演　美濃市文化会館

八月二十七日(月)～九月一日(土)
山形市中学校鑑賞会　山形市民会館

九月一日(土)
上山公演　上山市市民会館

九月二日(日)
岡山芸術祭に琵琶の半田淳子ほか集団メンバーが出演

九月三日(月)
上山市　学校鑑賞会　上山市市民会館

九月五日(水)
第八十五回秋の総合定期演奏会　朝日生命ホール

九月七日(金)～十四日(金)
秋田県巡回学校公演

九月二十三日(日)～十月二十日(土)
第十三次海外公演（ソ連・東ドイツ・フィンランド）
ゲヴァントハウス・オーケストラ、ヘルシンキ・フィルハーモニック・オーケストラと「急の曲」(三木稔）を共演。

十一月一日(木)
畦地慶司第三回胡弓リサイタル　大阪・朝日生命ホール

十一月四日(日)
札幌舞踊会東京公演出演　ゆうぽうと五反田簡易保険ホール

十一月八日(木)
坂田誠山第三回尺八リサイタル　芝ａｂｃ会館ホール

十一月十日(土)
田嶋直士第四回尺八リサイタル　芝ａｂｃ会館ホール

十一月十一日(日)
秩父「小さな音楽会」で日本音楽集団演奏会

十一月十五日(木)
三橋貴風尺八リサイタル　芝ａｂｃ会館ホール

一九八四年度日本音楽集団北日本公演

六月十八日の札幌を皮切りに北日本公演が行なわれます。今回は、この公演のために書きおろされた三木稔の「ダンス・コンセルタントⅣ北の詩」が各地で初演されるのも大きな話題です。

■日時・会場・曲目（☆は現地問い合せ先）　開場　各地とも午後六時半

札幌＝六月十八日(月)　札幌市教育文化会館大ホール　春鳳／畦地慶司作曲、萌春／長沢勝俊、ダンス・コンセルタントⅣ「北の詩」／三木稔、風／牧野由多可、大津絵幻想／長沢　☆アドビューロー☎二七一―四二二五

旭川＝六月十九日(火)　旭川市民文化会館大ホール　擣／三木、春籟／略地、北の詩／三木、萌春／長沢、大津絵幻想／長沢　☆旭川三曲協会事務局・近藤琇邦☎五三―五八七三

下川＝六月二十日(水)　下川町公民館　擣／三木、春鳳／畦地、北の詩／三木、萌春／長沢、大津絵幻想／長沢

苫小牧＝六月二十一日(木)　苫小牧市文化会館大ホール　擣／三木、春籟／畦地、北の詩／三木、風／牧野、大津絵幻想　☆苫小牧市文化振興連絡協議会☎三六―七八二三、苫小牧市三曲会広瀬雅津☎三二―二五三〇

長万部＝六月二十二日(金)　長万部町福祉センター　擣／三木、鶴の巣籠／宮田耕八朗編曲、北の詩／三木、春籟／畦地、大津絵幻想／長沢　☆畦地清司方☎二―二三三七

函館＝六月二十三日(土)　函館市民会館大ホール　擣／三木、春鳳／畦地、北の詩／三木、萌春／長沢、大津絵幻想／長沢　☆高市一男☎四一―六七二八

青森＝六月二十七日(火)　青森市民文化ホール　颯踏／長沢、扇の的、北の詩／三木、萌春／長沢、大津絵幻想／長沢　☆黒坂昇方☎七四―四三四四

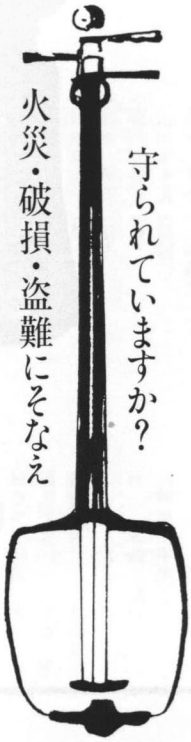
盛岡＝六月二十七日(水)　岩手県民会館中ホール　颯踏／長沢、北の詩／三木、萌春／長沢、大津絵幻想／長沢　☆メルク内五四―一一〇一

■今回の出演者

笛／望月太八　尺八／宮田耕八朗、坂田誠山
胡弓／畦地慶司　三絃／太田幸子　琵琶／半田淳子
箏／白根きぬ子
箏・十七絃／宮本幸子（苫小牧まで参加）
　花房はるえ（長万部から参加）
箏・二十絃／木村玲子
打楽器／藤金成敏、黒坂昇
指揮／田村拓男

ワイドな保障で暮らしにゆとりを

事故のない日はない。こういっても過言でないほどさまざまな危険が私たちをとりまいています。
車社会の進展や産業技術の高度の発達によって、災害の多様化・大規模化がすすみ、人びとの生活をまもる損害保険の必要性は日々高まっています。安田火災は、皆様のくらしを守ります。



あなたの楽器は
守られていますか？
火災・破損・盗難にそなえ
リスクチェックを明和損保に
おまかせ下さい。

安田火災海上保険株式会社専属代理店．日本音楽集団・指定代理店
明和損害保険企画 リスク・マネージャー 小笠原明男
☎板橋支社　(03)962-7311
☎事務所　(03)937-0547

Murasaki

TOKYO・NEW YORK・PARIS・MILANO

色が香りになった　紫のあでやかさ

世界で匂いたつ 日本の優雅

資生堂むらさき

● パルファム……10,000円　● オードパルファム……3,000円

● オードパルファム(ピュアミスト)……3,500円

日本音楽集団 Nihon Ongaku Shudan (Pro Musica Nipponia)

代　表　長沢　勝俊
副代表　坂田　誠山
運営委員長
事務局　奈良　義寛（局長）
　　霜島　素子
監　事　芹沢　英雄
マネージメント協力
株式会社　ジャパン・アーツ

団員連名

〈正団員〉

望月　太八（笛）
西川　浩平（笛）
宮田耕八朗（尺八・笛）
坂田　誠山（尺八）
三橋　貴風（尺八）
福田　輝久（尺八）
田嶋　直士（尺八）
藤崎　重康（尺八・笛）
竹井　誠（尺八・笛）
米澤　浩（尺八）
畦地　慶司（胡弓・作曲）
野口美恵子（三味線）
太田　幸子（三味線）
半田　淳子（琵琶）
田原　順子（琵琶）
坂井　敏子（箏・三味線・胡弓）
白根きぬ子（箏）
宮本　幸子（箏）
野坂　恵子（箏）　休団中
吉村　七重（箏）
花房はるえ（箏・三味線）
宮越　圭子（箏）
木村　玲子（箏）
内藤　洋子（箏）
滝田美智子（箏）
尾崎　太一（打楽器）
藤舎　成敏（打楽器）
堅田　啓輝（打楽器）
高橋　明邦（打楽器・指揮）
黒坂　昇（打楽器）
田村　拓男（指揮・打楽器）
稲田　康（指揮）
長沢　勝俊（作曲）
三木　稔（作曲）
内田とも子（作曲）
中島　隆（楽器係）

〈準団員〉

素川　欣也（尺八）
水谷　雅康（尺八）
蓑田　司郎（三味線）
加藤　洋（三味線）
田中悠美子（三味線）
山本　哲子（三味線）
山田まゆ美（琵琶）
熊沢栄利子（箏）
松本　和美（箏）
田嶋恵美子（箏）
佐藤　里美（箏）
小林恵美子（箏）
飛山百合子（箏）
内藤　久子（箏）
大畠菜穂子（箏）
島崎　春美（箏）

〈研究団員〉

岡田　寿子（箏）
水川　寿也（尺八）
佐藤由香里（箏）
中野はるな（箏）
山田　明美（箏）

〈特別留学生〉

杜　菊衷（胡弓）

名誉団員　山田美喜子
協力団員　伊藤　惣一
地方在住団員　塚本　早苗

昭和五十九年四月現在

〈賛助会員〉

（有）琴光堂和楽器店
（松本・諏訪・東京）
滝沢　修
野坂　操寿
鶴田　錦史
三木　卓雄
渡辺　精一
高瀬　卓郎
霜島　邦子
半田多真美
古川羽衣山
丹野井成寿

〈団友〉

青木　誠
秋浜　悟史
荒谷　俊治
稲垣　隆史
小田切清光
川崎　祥悦
菊地　悌子
楠　知子
鞍掛　昭二
鯉沼　広行
杉浦　弘和
砂崎　知子
戸井　昌造
藤舎　呂悦
仲俣申喜男
中村　八大
野口　鎮
横山　勝也
佐藤　敏直
芝　祐靖
清水　義矩
芹沢　英雄
高野　文子
田中　利光
鶴野　和子
広瀬　量平
鳳声　晴由
星　旭
増田　睦美
元橋　康男
矢崎　明子
柳家小三治
ディヴィッド・ロープ
ディヴィッド・ヒューズ
ヘンリー・バーネット
ラニィ・シェルダン
王　燕樵
張　暁輝

〈維持会友〉

AOIミュージック株式会社
株式会社西友ストア
株式会社豊島園
株式会社ノサカ
書画筆工業
西武建設株式会社
西武鉄道株式会社
西武百貨店
誠和音芸
大和精工株式会社
タマチ工業株式会社
日本オペラ協会
菱電商事株式会社
宮園自動車
宮園オート
青柳　孝年
赤木　明
朝吹　英一
井阪　紘
稲木　一
榎本　容三
遠藤　将一
岡　昇三
金子　博美
家根原光子
亀田　和保
河野　義博
近藤　栄一
國持　光生
柳川　創造
福田　洋一
武江　利博
田村　鎮男
寺島　孝之
内藤　国枝
永根　玲子
奈良　英雄
根志　彰
新倉　鶴子
野坂　純一
旗野　恵美
早川佐和子
花房　艶子
原　順一郎
高橋　克己
星　光和
鱒　毬
町田　文子
松井　翠
松原　剛
宮川　国恵
柳田　正治
吉岡　紘子
頼本美保子

日本音楽協会

協会世話人
長沢勝俊（代表）・三木稔・野坂恵子・宮田耕八朗・田村拓男・山田美喜子・坂井敏子・坂田誠山・田嶋直士・奈良義寛・芹沢英雄

構成団体
日本音楽集団
野坂恵子二十絃箏エコール
ぐるーぷ・だだ
尺八ゾリステン
関西音楽集団
「星組」合奏団（東京）
合奏団「たあく」（東京）
合奏団「鼎」（関西）
合奏団「游」（仙台）
合奏団「グループ・みずほ」（名古屋）
Nipponia Hawaii Ensemble（ハワイ）
＊以上六団体は日本音楽協会合奏団を構成します。

協会支部
東京支部　日本音楽集団事務所扱い
関西支部　田嶋直士（〒[redacted] TEL[redacted]）
水戸支部　斉藤幸山（〒[redacted] TEL[redacted]）
長野支部　佐藤幸宇山（〒[redacted] TEL[redacted]）
山梨支部　郷晃（〒[redacted] TEL[redacted]）
長崎支部　牧山雅楽郁（〒[redacted] TEL[redacted]）
熊本市部　古川羽衣山（〒[redacted] TEL[redacted]）
秋田支部　野口裕子（〒[redacted] TEL[redacted]）
邦楽の会つばら事務局）

■日本音楽集団創立二十周年
記念シリーズを成功させる会の発足

このたび、集団を積極的に応援してくださるファンの方々が集り、右のタイトルのような長い名前のついた会が発足することになりました。集団と緊密な連絡をとりながらすすめますが、ファンになってくださる方々自身の会です。

今後の活動としては、聴衆のより一層の拡大で集団を支援していただくこと、音楽家との対話シリーズの開催、ニュース「和の声」の発行、集団との交流会等々が計画されています。積極的なご参加により、みなさま自身の手で音楽界、現代の邦楽界を盛上げて頂きたいと思います。

編集　日本音楽集団　〒151東京都渋谷区笹塚3―17―1滝沢ビル　電話　〇三―三七八―四七四一（代）
印刷　株式会社　光藍社

おしらせ

■次回演奏会のご案内

●創立二十周年記念コンサートの第二回目は、**第八十三回定期演奏会「室内楽の夕べ」**として集団が行なった公募作品の入賞曲を中心にプログラムを組みました。

①花と風　中村滋延作曲
②行　伴谷晃二作曲
③坐楽　永瀬博彦作曲
④雨月譜　吉松　隆作曲
⑤纏（てん）　新実徳英作曲
六月十一日（月）芝ａｂｃ会館ホール

●記念コンサートの第三回目は**第八十四回定期演奏会**として、若い指揮者稲田康による意欲的なプログラムです。

①二つの舞曲　長沢勝俊作曲
②太棹協奏曲　牧野由多可作曲
太棹三味線　田中悠美子
③雨の向うがわで　池辺晋一郎作曲
④朱輪金鈴　長沢勝俊作曲
七月六日（金）芝ａｂｃ会館ホール

●創立二十周年記念コンサート秋の幕あけは、九月五日（水）朝日生命ホールの**「秋の総合定期演奏会」**です。佐藤敏直・中村八大両氏の委嘱作品、長沢勝俊の新曲、記念作品公募より入選作一曲のオール初演演奏会を企画していますのでご期待下さい。

■記念作品公募

創立二十周年を記念してただいま作品を公募中です。積極的なご応募をお待ちしています。応募作品の中から一位に選ばれた作品は秋の総合定期演奏会（九月五日）で上演される予定です。また佳作についてもできる限り上演機会を得られるよう努力します。審査員は伊福部昭・広瀬量平氏および日本音楽集団です。募集締切りは六月十一日にせまっています。詳細は日本音楽集団事務局までお問い合せ下さい。